

登山・登攀の記録

北アルプス 剣岳 池ノ谷ドーム壁 βルンゼ

日時:1958年8月6日

メンバー:CL 小山 貢(OB) 林 隆彦

概要: 1958年夏、西京大学山岳部現役の合宿に参加した際、未登らしく思われるβルンゼについての話が出た。多くの意見はルンゼを登ってからのドーム壁が大変だろうというもの、登攀価値がないのではなかろうかというものだった。

しかし、私自身が同年5月初めに東大谷中俣をつめた際、カニのハサミ付近より偵察して受けた感じではαルンゼの方へ逃げられそうだし、またドーム頂稜へ登るにしても問題となるのは時間と体力であると思えた。

登攀価値については現在ドーム壁登攀ルートが一本しかないらしいので、βルンゼよりのルートを開拓すること、及び高須、高瀬氏共著の「剣岳」によれば“すばらしいルンゼ……”“今後に残された課題”等の説明があり、ベースボールマガジン夏山特集の記載によれば“小さなルンゼ”となって居て相違があり、その点をはっきりすることにおいて登るべき価値は充分であると解釈していた。

そこでかねがね機会があれば登りたいと思っていたのだが、この年の合宿では現役の都合もあるので単に右俣方面偵察として出発して、そのまま登ってしまった様な次第で最初から予定していなかった為に、現実的精神的に準備が不十分であり、細かい記載のできないのが残念である。この不十分な記録が今後のドーム壁のルート開拓に少しでも役立つことができるなら望外の喜びである。

(付記)これは、『岩と雪』4号(1959年刊)に東大谷 G I 尾根の記録と一緒に掲載された記事の転載である。『日本登山大系5「剣岳・黒部・立山」』には、「ルンゼそのものはさして困難ではないが、岩質が非常に脆く、ハーケンの使用は極度に制限される。初登以来あまり登られたという話は聞かない」と紹介されている。

記録

8月6日 快晴

三ノ窓(8:00)-二股(9:00/9:30)-第二滝クレバス(11:30)-登攀開始(13:00)-βルンゼ終点(18:10)-三ノ窓帰幕(21:40)

30mザイル1本、三ツ道具、捨縄1、ピッケル、アイゼン、昼食、非常食、ミカン缶、水筒2を携行、アイゼンは二俣からの登り時間をかせぐつもりだった。ガラガラ左俣を下り間もなく雪渓に出て割れ目を避けながらグリセードを利用して二俣着、剣尾根の末端から右俣側へ少し登って食事。この辺は傾斜もゆるいので当分はアイゼン無しで行くことにする。αルンゼに水の流れているのを見ながら通過し第一滝クレバス着(10:00)。クレバスの状態は大きな二段の断層になって居り、一段目の底で十分程休憩。

「ルート図」によれば左岸を絡むのだが二段目から上のルートが見つからず、どうしても通過出来な

いので一段目へ引返し右岸のドーム壁に吊り上げをやってみたりしたがうまく行かない。最後に今にも割れ落ちそうなラントクルフトの端を確保しながら慎重に渡りバンドに出ることができた。

上部の雪渓は急になっているのでそのままコンティニアスで行く。

第二滝クレバス着 11時半。中央ルンゼはここで扇状に広がり、上郎は右に曲り見えなくなっている。向って左のドーム壁には、急なルンゼの落ち口が見え、その右手にテラスがある。

ここまで来ると、偵察に出たのではあるが、OBと云う立場の気安さから行く先は未定と云って出たので、βルンゼを登りたくなってきた。それにあまりむずかしそうにも思えない。

とにかくやってみることにして、左岸を絡み、念のためハーケンを一本打ってクレバス底の雪に立ち、立派なバンドを左へ登ると大きなテラスへ出た

登山・登攀の記録

(12:30)。ここにはミヤマオダマキがちらほら咲いていて美しかった。

食事には最適なので食べているとガスが昇って来て暗くなり、気味が悪かったが晴れるとまた元気になる。食後にミカン缶一個を奮発して出発する(13:00)。



(1960年3月の早月尾根 2500m から劔尾根ドーム壁 写真/高田)

ルンゼの落ち口の所は底がごく浅く洗われてスラブ状になっていて、向い側のドーム壁に濡れた斜めのチムニーがある。

取りつきはもう一段上のテラスから入り込むことにして一旦右の方へ出てからバンド伝いに戻ってくると、幅は思ったよりも狭く、二人がようやく立てる位のものだった。

ルンゼの角を廻り込む所が悪く、スタンス、ホールド共になく、角の辺りに一本打てれば振り子でも入れるのだが適当なリスもない。この他に適当なルートもなさそうなのでがんばるが疲れる一方。何度も失敗したあげく、林が肩の上に乗りようやくルンゼに入った。ルンゼは幅が狭く、落ち口から少し上は浮き石が多く、岩なだれの危険がある。

早月尾根から見ても分るように中程は傾斜も比

較的ゆるいが、チョックストーンで作られたハング気味の小涸滝がいくつもある。

この小涸滝群は落石に注意すればチムニー登りで簡単に乗り越せるが相当の腕力を要する。涸滝を越したところは大抵の場合傾斜が緩くなっていて気分的に楽であった。岩は全体に非常にもろ



(劔尾根ドーム壁ルート図)

いが右岸には比較的固い部分があり、状況により一、二箇所右岸を巻いたが、セカンドは直登した。

リスのある所はハーケンがきかず、岩の固い所はリスが無いという状態で確保に苦心するが、技術的には難しいものではない。ただ落石には苦労させられ、ザイルをひと手繰りする毎に落ちる位なのでセカンドは常に上を見ていなければならなかった。

上郎へ行く程傾斜が急になり、幅は狭くなり、チムニー登りの連続となる。涸滝の数も多くその間隔を狭めながらルンゼは向って右手のハイマツカンテに近づいている。

上部の岩の色は赤茶けて極端にもろく、突張った手をはなすだけでも崩れ、一動作毎に落石するので非常に気を遣った。

下の雪溪から約170~180m程登った所で珍しく右手にやや固い小さなテラスがあったので、ルンゼを出てこれをアンカーレッヂとする。

セルフビレーに岩角を利用して試しに少し引いてみたら、一抱え程の岩がグラリと来たので思わず悲鳴をあげた。あわててザイルを架け替えたが、これも心もと無い。と云ってハーケンの打てそうな

登山・登攀の記録

所もないので、頼りない岩角二つにザイルを架けて、下へ合図する。

この一ピッチと次の一ピッチは上を見るとトップの股の間から空が見えると云う殆んど90度近い斜度で、かつルンゼの幅は1m位の狭さで完全なチムニー状をなしている。

セカンドの頭が足下に出て来て段々せり上りながら廻り込んできて二人並んで立つ。ハイマツのあるカンテはすぐ右手にあり手が届きそうなのだが行けないのでまたルンゼに入る。両手と両足を突張って登ると手や足を壁からはなす毎にパラパラ落石するが、今度はセカンドがルンゼの外に居るので問題ない。二十メートル程度登るとルンゼは草付のドーム壁に消えている。

ルンゼの終点から左方には出られず直登もまた不安定な草付なので両足を突張ったまま右手を伸ばすと、ギリギリ一杯でハイマツに届いたので思わず歓声がでる。余程嬉しそうな声だったらしく後に冷やかされた。強引に腕力でカンテに出てルンゼの登攀を終り、太いハイマツの根本にビレーしてやっと落ちつく。

このカンテからは中央ルンゼ本谷、中央壁本峰方面、早月尾根が見え、ドーム頂稜へは容易に登れそうであった。時間は遅いし先は長いので休憩もせず、更に2ピッチや右よりにブッシュの中を直登した所で、疲労を感じたので休憩(18:20)。二人で食べた一個のミカン缶のうまかったこと。「うまかったなあ」を連発しながらビスケットをかじり、劔峰方面をカメラに収めて出発。そのまま右へ行くとブッシュを抜け緩い斜面に出る。

ここもドーム壁の一部には相違ないのだが傾斜はゆるく壁面にいると云う感じはなく、ドーム頂稜へ登るには何の苦労も無さそうであった。ここからなら頂稜直下では少々のあるかも知れないが、いくつかのルートを取り得ると信ずる。

三ノ窓のキャンプで心配するといけないので容易に登れることだけを確かめて、更に右へトラバースして α ルンゼに入り、階段状に登ってコルBに到着した(19:00)。

三ノ窓へコールして応答を得る間、少し休んで

いるうちにもう暗くなって来たので急いでR2(左俣側)を降り始める。疲れているのでザイルをつけたままだったが、かえって邪魔になり、暗い上に足元も少しあやしくなったので落石を起しとうとう林の足に当たってしまった。幸い痛みもすぐとれ雪溪に出たので小休止。雪を頬ばりながら降り、左俣出合の水場でまた休憩。

「合宿のカンパンよりは」と持って来た上等のビスケットはもう喰いつくしたので非常食の甘納豆に手をつける。林は「これが喰えたので今日出て来た甲斐があった」等と冗談を云う。

左俣の登りは、三ノ窓まですぐなのだが案外にはかどらず、テントから迎えに来た一人が、あまり遅いので心配したと云う。持って来てくれた紅茶をからにすると足が軽くなった様な気がして間もなくテントに帰着した。

尚ルンゼに入ってからハークンを使用しなかったが、使用出来なかったと云う方が当たっているかも知れない。

今回の登攀によって得た結論は β ルンゼの終点付近からドーム頂稜へのルートがいくつか取り得るであろうこと。又 β ルンゼ中程からもドーム壁登攀ルートが取り得るであろうこと(これは前者よりも高度の技術を要するであろう)。

β ルンゼは取付付近と最後の二〜三ピッチを除いては、ルンゼ上部と大差なく、全般的に見てもそんなに難しいものでは無いこと。しかし高距は200m近くもあり、ルンゼらしいルンゼと云えること等であった。

β ルンゼからのドーム壁登攀は1959年夏にでもやってみるつもりである。その後調べたところによると、ルンゼ登攀の記録はこれまでにはなかった様である。

最後に劔岳西面、南西面について種々御示教を頂いたベルニナ山岳会沢村幸蔵氏及び魚津岳友会佐伯郁夫氏に謝意を表した

参考文献

「岩と雪」4号(1959年)、劔岳「岳人」77・78・87
1958年8月「ベースールマガジン」夏山特大号

(記/小山)